

青島戦ドイツ人捕虜の元部隊について
—ドイツ海兵隊の歴史と性格—

井戸 慶治

Über die ehemaligen Einheiten
der deutschen Kriegsgefangenen aus Tsingtau
- Die Geschichte und die Eigenschaften der deutschen Marine-Infanterie -
Keiji Ido

Abstract

Die vorliegende Arbeit untersucht, was für Eigenschaften die deutsche Marine-Infanterie hatte, zu der die meisten deutschen Kriegsgefangenen aus Tsingtau gehörten, indem ein Überblick über die Geschichte und die jeweiligen Aufträge dieser Truppe gegeben wird.

In der Kriegsmarine von Brandenburg-Preußen bis Mitte des 19. Jahrhunderts kämpften Seesoldaten an Bord bei Nahgefechten, vor allem beim Entern mit Handfeuerwaffen, und übernahmen den gesamten Wachdienst, während Matrosen hauptsächlich Takelage und Geschütze handhabten. Dann kam bis zur Wende des 19. und 20. Jahrhunderts der Auftrag hinzu, wichtige Häfen zu schützen und durch Landung Gebiete in Übersee zu besetzen. In diesem Zeitraum erlangte das Deutsche Reich die Kolonien in Afrika und im Pazifik sowie das Pachtland Kiautschou, in dem das dritte Seebataillon stationiert wurde. In der dritten Periode bis zum Ausbruch des Ersten Weltkriegs wurden sie bei Unruhen als das beweglichste Detachement nach China, Südwestafrika und Ostafrika verschickt, wo sie auch rassistische, nicht immer ritterliche Kriege mit Eingeborenen führten. Daher war die Marine-Infanterie in der Friedenszeit Europas vom Deutsch-Französischen Krieg (1870-71) bis zum Ersten

Weltkrieg im Vergleich zur Armee reich an Kriegserfahrung. Mit dem Heer hatte sie immer in enger Verbindung gestanden. Bereits in der Anfangszeit der Marine-Infanterie im 17. Jahrhundert waren Seesoldaten Musketiere aus brandenburgischem Heer. Später wurde auch angeordnet, dass ein ständiger Wechsel zwischen Armee und Seebataillon stattfindet und dass Offiziere erst nach 2 bis 3 Jahren Frontdienst in der Armee ins Seebataillon eintreten durften. Daraus ergibt sich, warum die Marine-Infanterie dieselben Dienstgradbezeichnungen, nicht wie die der Marine, sondern wie die des Heeres hatte.

はじめに

本稿は、第一次世界大戦における青島戦ドイツ人捕虜研究の一環として、彼らの原部隊、特に「海兵隊」または「海軍歩兵」¹の歴史を概観することによって、この部隊の性格を明らかにしようとするものである²。日独戦争時の青島守備隊は、各種軍艦の乗員を除けば主として「第三海兵大隊」、「膠州海軍砲兵隊」、「東アジア海軍分遣隊」の三部隊からなり、これらはそれぞれ数個中隊からなる³。いずれも海軍の所属でありながら、陸上勤務を主とする部隊である。しかし、「膠州海軍砲兵隊」と他の二つの部隊の間には階級名や服装に相違があり、「第三海兵大隊」と「東アジア海軍分遣隊」は、これらの点で陸軍との共通点の方が多い。なぜだろうか。そして、これら二つの部隊が属する海兵隊と陸軍との関係は、どのようなものなのか。これらの問題は、ドイツ海兵隊の

¹ 同一の部隊に対し Seesoldaten, Marineinfanterie という二つの呼称があり、ここに示したのはそれぞれの逐語的な訳である。訳語の問題に関しては後ほど言及するが、さしあたりここでは主として「海兵隊」の語を使用する。

² これに関するこれまでの国内の文献は、松山収容所の捕虜が作った新聞「ラーガーフオイアー」(“Lagerfeuer”)の中の、海兵隊を中心としたドイツ海軍の歴史を扱った一連の記事(ブッターザック中尉執筆。14号、17号、20号に掲載。)の富田弘による要約(富田弘:「板東俘虜収容所 日独戦争と在日ドイツ俘虜」法政大学出版局、1991年、255-266ページ)である。また、「青島戦ドイツ兵俘虜収容所研究」第3号、青島戦ドイツ兵俘虜収容所研究会、2005年、3-76ページにおける、部隊名・階級名について扱った4つの論考も参照できる。

³ 注2に示した「青島戦ドイツ兵俘虜収容所研究」第3号18ページ(田村一郎:「青島戦当時のドイツ軍の部隊名・階級名をめぐって」)によれば、守備兵総数4920のうち、第三海兵大隊1948、膠州海軍砲兵隊905、東アジア海軍分遣隊404、各種軍艦の乗員681、などとなっている。はじめの三つの部隊については、戦闘直前に臨時に招集された東アジア在住のドイツ人を含む数字であるから、平時の兵力はこれよりもやや少ない。

成立から第一次大戦直前までの歴史と、それぞれの時代においてこの部隊に課せられていた任務をたどっていけば、ある程度解明されるであろう。

本稿執筆にあたって基本的な資料として参照したのは以下の二点である⁴。

Geschichte des I. Seebataillons. Bearb. von Max von Prittwitz und Gaffron, Oldenburg i. Gr. (Stalling) 1912. (「第一海兵大隊史」)

Geschichte des III. See-Bataillons. Bearb. von C. Huguenin. Tsingtau (Adolf Haupt) 1912. (「第三海兵大隊史」)

しかし、これらはいずれも、ドイツ海兵隊の軍人が自分の所属部隊について記述したものであることを考慮しなければならない。これらは、公的文書の引用や軍事的記述の詳細において正確であることは認められるが、対象となる組織の内部からの記録であるから、その客観性には限界がある。一方の当事者が書いた戦史がもう一方の当事者に公正でないことは、まれではない。例えば、植民地の反乱鎮圧における反乱側現地人への過酷な対処という事実は、その公表により道義上の問題が生じてドイツや自分の所属部隊の利益を損なうと見なされれば、当然無視または修正されるであろう。当時のヨーロッパに支配的であったナショナリズムを考慮すれば、なおさらそのことは言える。基礎資料のこのような弱点を補い、ある程度の客観性を確保するために、ドイツ領南西アフリカの反乱における捕虜待遇を扱ったものや東アフリカの宗教的反乱を扱ったもの、また17世紀以降のプロイセン海軍を扱ったものなど、他の視点から見た比較的最近の文献も用いた。

ブランデンブルクの家軍と海兵隊

1871年に成立したドイツ帝国の根幹となったのはプロイセン王国であり、その前身はブランデンブルク辺境伯領であるが、それゆえにドイツ帝国の家軍と海兵隊は、途中に海上進出における大きな空白期間があるにもかかわらず、みずからの発祥をブランデンブルクの家軍に求めている。ブランデンブルクの君主で「大選帝侯」と呼ばれたフリードリヒ・ヴィルヘルム(在位1640-1688)は、三十年戦争で領土を増やし、常備軍を備えて侵入してきた当時の強国スウェーデンの家軍をフェールベリンにおいて破った(1675年)が、他方、貿易の利益を守るために艦隊を創設し、海外への進出をはかる。オランダ人船主

⁴ このほか、注2に挙げた「ラーガーフォイアー」の記事も参照した。また、以下の文献とホームページも、ドイツの家軍と海兵隊について概観するために用いた。Unsere Kriegsmarine. Vom Großen Kurfürsten bis zur Gegenwart. Von Vizeadmiral a.D. Dr. eh. von Mantey. Berlin (Offene Worte) 1935. <http://www.marine-infanterie.de/>

Benjamin Raule の援助のもと、賃貸した船で艦隊（1680 年において 28 隻、砲 502 門）を編成し、これがスウェーデンとの戦いやスペインとの紛争（1680 年）において重要な役割を果たす。その後、ブランデンブルクはフランスの資金援助で自前の艦隊を所有することになるが、このときはじめて、マスカット銃を装備した陸軍部隊が船上に配置される⁵。

「その任務は小火器の操作であり、これは 19 世紀の中頃まで、本質的な戦闘のファクターであった。その他、この銃隊は船上の見張り任務をおこなった。彼らはまた、大砲の操作のための補助要員であり、非常に広範囲な清掃の任務を水兵とともにこなった。水兵は、まず第一に操帆装置と大砲を扱う訓練を受けていた。」⁶

「甲板には船の操作のため必要な水兵のほかに、戦闘をおこなうための若干数の兵士もいつもいた。」⁷

この「銃隊」(Musketiere)、「若干数の兵士」が、海兵隊の先駆けとも言える部隊である。海兵 (Seesoldaten, Marinier) と水兵 (Matrosen) の区別はこれ以降も資料の中で幾度か言及されており、その関係は時代により多少の変化はあるが、ともかくこの二つの兵種の差異が、海兵隊の性格を際立たせるものとなっている。航海術と艦砲の操作を技術者・労働者としての水兵が受け持ち、銃による近接戦闘や警備を戦闘員としての海兵が受け持つというおおよその任務の分担がなされていたのである⁸。「小火器の操作」が「本質的な戦闘のファクタ

⁵ Kurt Petsch: Seefahrt für Brandenburg-Preußen 1650-1815. Geschichte der Seegefechte, überseeischen Niederlassungen und staatlichen Handelskompanien. Osnabrück (Biblio Verlag) 1986, S. 148ff.には、1680/81年に建造されたフリゲート" Friedrich Wilhelm zu Pferde" (長さ 35メートル、幅 9メートル、乗員 200名、砲 60門)の乗組員の名簿が引用されているが、その中に銃隊(musketire)の部があり、64名乗りこんでいる。この名簿によれば、水兵(113名)の出身地はドイツ、オランダ、デンマークなどのさまざまな町である。これに対し、銃隊隊員の出身地は記されていないが、名前から見てドイツ人がほとんどである。

⁶ Lagerfeuer, S. 274.

⁷ Geschichte des I. Seebataillons. Bearb. von Max von Prittwitz und Gaffron, Oldenburg i. Gr. (Stalling) 1912. S. 3.

⁸ 野中郁次郎:「アメリカ海兵隊 非営利型組織の自己革新」中公新書、1995年、4ページ以降、によれば、アメリカ海兵隊は、独立戦争時にイギリスの「ロイヤル・マリーネズ」にならって作られ、海軍所属の歩兵部隊として最初は艦上勤務、小規模上陸作戦、陸軍支援の陸戦という三つの任務を持っていた。艦上での任務の一つは、荒くれ水夫に船内秩序と規律を守らせる警察官の役割で、反乱対策である。また「海上戦闘では、小銃で艦橋から相手指揮官を一人一人狙撃したり、敵艦と接触した場合には、甲板であって斬り込み攻撃の先鋒を務め、敵乗組員を倒したり」する。海賊退治も重要な仕事であった。その後、米西戦争で海外領土を獲得した頃から、艦隊の前進基地の防御や外国へ

一」だったとされるのは、帆船時代の艦砲の射程距離や威力が十分でなかったためであろう。17世紀の終わり頃の艦砲の有効射程距離は、砲弾の重さにもよるが、直接射撃（水平の弾道）で200-550メートル、最大射程（山なりの弾道、ただし海上の船同士の戦いではほとんど命中しない）は3000-4000メートルにすぎなかった。その後200年間、この方面での発達は遅々たるもので、ネルソン提督の頃（1800年前後）にはまだ直接射撃の射程は600メートルであった。これは当時の陸上砲に比べてもはるかに短い射程であるが、その原因は、艦砲に適した単純な照準装置がなかったこと、船上での砲の操作がより困難であること、少し離れると厚い船の壁を鉄の弾丸で貫通することができないことなどが挙げられている⁹。戦闘準備(Klar zum Gefecht)のさいには、「さらなる命令に応じて、艦砲要員は点検済みの砲の発射準備をし、海軍兵(Marinesoldaten)は、甲板と檣楼にある戦闘詰所に入った。海軍兵は、近接戦闘、とりわけ敵船乗り込みのさいに、携帯火器をもって攻撃または守備を支えたのである。」¹⁰Marinesoldatenは、水兵を意味することもあるが、ここでは「艦砲要員」が主として水兵の役割なので、文脈上「海兵」のことであろう。艦砲の威力は徐々に大きなものとなってゆくが、それだけで敵船を撃沈することはこの時代にはまれであった。「最高の目標は敵船の破壊ではなく、その捕獲であった。このことはその当時、戦意を掻き立てるために、獲得した船について賞金が提供されていたことでもわかる。」¹¹

大選帝侯は、さらに2隻の船を西アフリカ黄金海岸のTres Puntasに派遣し、そこに上陸部隊がブランデンブルクの旗を掲げて駐屯地"Großfriedrichsburg"を作る。ここで、海兵に関する以下のような言及がなされている。

「エムデンの近くのGretsyl (Greetsiel)城にはすでにブランデンブルク大選帝侯の守備隊がいた。一つはこの町そのものを長期にわたって防衛するために、今一つは船の乗組員に必要な人員をいつでも確保できるために（のちにアフリカで新たに作られた要塞の防衛と維持のために用いられた）、1684年10月1日、アフリカ会社のもとに「海軍の中隊」(Compagnie de Marine)が、大尉1名、

の介入のためにも用いられ、義和団事件のさいには、ジョン・T・メイヤー大尉指揮の海兵隊が北京の各国公使館を守る少数の連合軍に加わった。日本にも明治初期にイギリスにならって海兵隊が作られたようであるが、もはや帆船時代ではなかったためすぐに廃止された。しかしのちに海軍特別陸戦隊という海兵隊と類似の部隊ができ、二度の上海事変や太平洋戦争時の島々に投入された。

⁹ 以上数行については、Petsch, S. 166f.を参照。

¹⁰ Petsch, S. 176.

¹¹ Petsch, S. 177.

少尉1名、旗手1名、兵士110名で作られた。すでに最初の年にこの部隊は増強され、このとき海軍大隊 (Marine-Bataillon) の名を得た。」¹²

船上での任務の他に、彼らは植民地の要塞や自国港湾の防備という陸上の任務をも負っていたことがわかる。その後、1685年には現モーリタニアの Arguin 島を占領しているが、1688年の大選帝侯の死以来、「アフリカ会社」は徐々に衰える。1701年にプロイセンは王国となるが、1720年、選帝侯フリードリヒ三世はアフリカ会社を、またのちにフリードリヒ・ヴィルヘルム1世はアフリカ植民地をオランダ商人に売却する。海兵大隊は縮小され、1757年には解消され、プロイセンはもっぱら大陸での勢力拡大に力を注ぎ、艦隊は細々と保持したがドイツの軍事的な海外進出には100年以上の空白が生じることになる。

プロイセン海軍における海兵隊

1848年から翌年にかけて、プロイセンとデンマークの間に、シュレースヴィヒ・ホルシュタイン戦争と呼ばれる紛争が起こる。ユトランド半島の南部、特にシュレースヴィヒはドイツ系住民の中にデンマーク系住民が混在していて、ホルシュタインとともにその帰属が数百年来問題になっていた。両地域は、古くから自治権を確立していたが、形式的にはその君主をデンマーク王が兼ねることになっていた。1864年にデンマークからこの地域が完全に切り離されるまで、かつての強国デンマークの勢力は、半島の付け根のハンブルク・リューベックの線まで来ていたのである。19世紀になってナショナリズムの高まりとともに、シュレースヴィヒのデンマーク系住民はデンマークとの強い連合を、ドイツ系住民はホルシュタインとともにデンマークからの自立とドイツへの併合を希望して、政治的不安定が生じていた。後者はプロイセンとドイツ諸邦に援助を求め、交戦が起こる。このとき、優勢なデンマーク海軍に港湾を封鎖されたため、ドイツ側の海上貿易が不可能となる。陸上ではプロイセンが有利だったものの、デンマーク海軍の活躍やイギリスとロシアの圧力により、プロイセン軍はやむなく撤退し、その後この地方のドイツ系住民の運動は抑圧されてしまう。この戦争後、寄せ集めのドイツ同盟艦隊が財政難により、オルデンブルク公国の枢密顧問官ハンニバル・フィッシャーによって競売に付されるという滑稽な一幕もあった。もっとも、その大部分はプロイセンによって買収された。

この戦争の反省が、プロイセンの海軍増強への要請につながることになり、アーダルベルト王子のもとで、新しい艦隊とそれに必要な部隊 (海軍兵団

¹² Geschichte des I. Seebataillons. Bearb. von Max von Prittwitz und Gaffron, Oldenburg i. Gr. (Stalling) 1912, S. 3.

Marinekorps) が作られる。そのさい、海軍将校は商船隊から引き抜かれ、2 個中隊分の海兵には陸軍部隊の一部が充てられた。ブッターザックはこの時期の兵制について次のように記している。

「海軍兵団(Marinekorps)を……水兵団(Matrosenkorps)と海兵団(Marinierkorps)に分割。名前の通り、前者は船員だけを受け入れるが、後者は陸軍と同様に、兵員不足を陸軍補充兵によって補うことになった。三年間の軍務ののち、彼らは水兵と同様に海軍予備(Marinereserve)となり、さらに海軍後備(Seewehr)となった。」¹³

また、各軍艦に分散配置された海兵の任務については次のように述べている。

「ブランデンブルク艦隊の時と同様、大砲の補助要員を務め、非常に広範な警備の仕事をおこない、戦闘のさいには小火器による射撃をすることである。最後の事柄は、当時の海戦において依然として重要な役割を演じていた。」¹⁴

海軍の拡張とともに海兵隊も 4 個中隊に増大し、1852 年には海兵大隊(Seebataillon)が作られる。5 月 13 日の勅令によれば、これまでの海兵団(Marinierkorps)を、海兵大隊(See-Bataillon)と呼び、Marinier には Seesoldaten の名を与えるとされており¹⁵、後者の名称が通称ではなく正式のものであることがわかる。参考のためブッターザックの記述も引用しておく。

「海兵大隊(Seebataillon)は、軍艦で働く海兵(Seesoldaten)のための基礎部隊となる。これは、水兵団(Matrosen-Divisionen)が水兵の補充部隊であり、工機団(Werft-Division)が、火夫、主計、縫帆員、銃工、看護兵などの補充部隊であるのとまったく同様である。」¹⁶

これによれば、陸上の任務よりも艦上の任務の方が主であったように思われるが、1854 年の勤務令では、陸上勤務についても言及がある。

「海兵大隊は歩兵部隊であり、主として船上と海岸定住地における駐屯地勤務を、さらに上陸を、また艦隊での勤務を使命とする。それゆえこれらの勤務のために、陸軍の歩兵のための勤務と訓練の諸規定も適用される。」¹⁷

海兵は銃、サーベル、銃剣の訓練をおこない、敬礼の仕方も水兵とは異なるものであった。以後、艦隊の船が増加するとともに海兵隊も拡大してゆく。

¹³ Lagerfeuer, 280.

¹⁴ Ebenda.

¹⁵ Geschichte des I. Seebataillons, S. 8. Marinier も Seesoldaten も「海兵」と訳すことができるが、前者はラテン語系、後者は純ドイツ語の単語。なお、この部隊の最も下位の兵卒の階級名も Seesoldat である。

¹⁶ Lagerfeuer, S. 333.

¹⁷ Geschichte des I. Seebataillons, S. 12.

1856年、4隻の艦隊がアーダルベルト王子の指揮のもと、大西洋に進出する。その中の旗艦「ダンツィヒ」は、地中海に入り、プロイセンの商船を奪った海賊を討伐する。北アフリカの Cap Tres Forcas 付近の海岸に陸戦隊が上陸し、王子自らも負傷しつつ、任務を遂行する。1857年には、沿岸砲台に配置される海軍砲兵隊(Seeartillerie)も創設される。これは1867年、海兵大隊から分かれ、1877年には2つの海軍砲兵部隊(Matrosen-Artillerie-Abteilung)へと発展する。部隊名に Matrosen という語があるので名目上は「水兵」の部隊であるが、陸上勤務の部隊である。艦砲にせよ要塞砲にせよ、固定された重砲を扱うのは、やはり以前と同じく「水兵」であり「海兵」ではないという住み分けが、少なくとも表面上はまだ続いているのである。のちの「膠州海軍砲兵隊」(Matrosen-Artillerie-Detachement Kiautschou)は、この系統を引くものであり、この部隊に所属していたハンゼン率いる徳島オーケストラのメンバーが水兵服を着て写真にうつっているのも、そのためである。

1859年末には、極東への大航海が企てられるが、その目的は、日本、中国、シヤムと通商条約を結ぶことであった。艦隊は、「アルコナ」「テーティス」「エルベ」「フラウエンロープ」の四隻からなり、特命大使ツー・オイレンブルク伯爵をはじめ、のちに中国の地理・地質学的研究によって著名となるフォン・リヒトホーフエンも参加している。途中台風に見舞われ、スクーター「フラウエンロープ」は行方不明となる。1860年9月に江戸に到着し上陸、外交官と将校、40名の海兵隊、40名の水兵で行進をおこなっている。使節団は、プロイセンのみならず他の領邦も含むドイツ関税同盟と日本との条約を求めたが、これに対して日本側は容易に同意せず、交渉は非常に長引いた。当時は攘夷運動の盛んな時期であり、ドイツ人と親しかったアメリカ公使館員ヒュースケンが暗殺されて、彼らもその葬儀に武装して参列するなど、緊張の中での日本滞在である。1861年1月24日、条約はようやく調印され、艦隊は中国に向かい、12月終わりにようやくバルト海へ帰還する¹⁸。

これに続く時代、プロイセンはオーストリアと同盟して再びデンマークと戦い(1864年)、さらにその結果ドイツの一部となったシュレースヴィヒ・ホルシュタインの問題をめぐってオーストリアと戦い(1866年)、ついでフランスと戦って勝利をおさめドイツを統一(1871年)、プロイセン王はドイツ皇帝と

¹⁸ この遠征については、「オイレンブルク日本遠征記」(上下)中井昌夫訳、雄松堂書店、1969年。Preußens Weg nach Japan. Japan in den Berichten von Mitgliedern der preußischen Ostasienexpedition 1860-61. Hrsg. Kommentiert und mit einer Einführung versehen von Holmer Stahncke. Tokyo (Iudicium) 2000を参照。

なる。これらの戦いにおいて、陸軍は比較的短期間で敵を圧倒したが、海軍はいまだにかなり貧弱で、それゆえ海兵隊は、デンマーク領であった島を占領した以外はそれほど目立った活動をしていない。なお、形式的には1867年以降、海軍はプロイセンとドイツの諸邦を含む北ドイツ同盟のものとなり、「同盟海軍」(Bundes-Kriegsmarine)と呼ばれる。ここで海兵大隊将校団の規則に変更が加えられる。海兵隊は小規模であるため、士官候補生を採用すると訓練や経験が一方的なものとなってしまう、のちに陸軍部隊に転属となったときに支障をきたす。そのため陸軍と海兵大隊の間で将校の交代を恒常的におこない、少なくともすでに二、三年実戦部隊での勤務をおこなった将校のみが、海兵大隊に配属される。そうすれば、彼らがのちに陸軍に戻ったとき、そこでの勤務に容易に慣れることができるというのである¹⁹。この海兵大隊は、のちのアメリカ海兵隊のように独立性の強い大きな部隊ではなかったため、少なくとも将校のレベルでは、海兵隊生え抜きは存在せず、陸軍とのあいだに普通に人事異動が行われていたことがわかる。またこのことから、海兵大隊が海軍の所属でありながら、階級名などが海軍の他の部隊とではなく陸軍と共通していることも理解できる。

この頃には、これまでのバルト海岸のキールに加えて北海側のヤーデ湾に本格的な軍港が建設され、「ヴィルヘルムスハーフェン」と名づけられる。ブランデンブルク時代からの海軍と海兵隊の根拠地に関して述べれば、最初はスヴィーネミュンデ、シュテッティン、ダンツィヒなどスウェーデン対岸のバルト海岸であったのが、プロイセンの西方領土拡大とともにキールなど西に移動し、最終的には外洋への進出を求めてヴィルヘルムスハーフェンなど北海沿岸にまで達している。海軍拡張により、海兵大隊も徐々に拡大され、普仏戦争の頃には4個中隊、将校22、下士官83、軍楽隊40、兵卒880という規模になっている。彼らは、各艦への分乗のほか、ヴィルヘルムスハーフェンとキールの守備という任務を持っていた。

ドイツ帝国の海外進出と膠州湾占領

1871年1月18日、ドイツ帝国が成立し、「同盟海軍」は「帝国の海軍」(Die Kriegsmarine des Reiches)となる。そのさい、海軍も海兵大隊も、本拠地をキールから北海側のヴィルヘルムスハーフェンに移転する。外洋で敵と戦うことができるように装甲艦が作られるようになり、帆船は減少し、海兵大隊が分乗す

¹⁹ Geschichte des I. Seebataillons, S. 35.

るのはもはや大型装甲艦のみとなる。大隊の訓練では、海上・陸上の砲撃訓練や、射撃、上陸、水泳などがおこなわれ、歩兵としての訓練は陸軍の基準に従ってなされた。

ドイツは植民地競争で出遅れたが、80年代の非常に短期間のうちにアフリカを中心としていくつかの地域を獲得する。トーゴ、カメルーン、南西アフリカ、ニューギニア北東部とビスマルク諸島（以上1884年）、東アフリカ、マーシャル諸島（以上1885年）などであり、その占領は海軍と海兵隊によっておこなわれた。（その後、1898年に中国における租借地青島と、1899年にマリアナ諸島、パラオ諸島、サモアが加わる。）1888年にヴィルヘルム2世が即位すると、90年にビスマルクを罷免して、海上政策を強引に推し進める。この皇帝のもとで、ティルピッツの「艦隊法」（1898年、1900年、さらに1908年と1912年に改正）が施行され、これによって艦隊は計画的に急速な大拡張を遂げる。その結果ドイツは、世界第二の海軍国となるが、第一位のイギリスの警戒を引き起こし、国際的孤立を招く。

1889年には、勅令によって従来 of 海兵大隊が、それぞれ4個中隊編成の二つの大隊に分割され、第一大隊はキールに、第二大隊はヴィルヘルムスハーフェンに駐屯する。これらを統括する中心的指導部が必要となり、「海軍歩兵」(Marine-Infanterie)の兵監部(Inspektion)が置かれ、従来陸軍の旅団長によって行われていた訓練の視察もこの部局の監査官(Inspekteur)によってなされることになる。ドイツの植民地の動向に目を向けると、1888年、東アフリカでアラビア人奴隷商人 Buschiri が起こした反乱が鎮圧される。1894年にはカメルーンで反乱がおこり、まず軍艦の陸戦部隊が投入され、その後二つの海兵大隊から選抜された一個中隊118名が派遣されるが、すでにその時点では平穏化していた。1895年には東アフリカの政治的混乱があり、79名の海兵隊が派遣されている。同年4月19日、キール運河が開通し、これによってバルト海と北海の連絡が非常に短縮された。なお、90年代終わり頃から、機械化の進展や砲の威力増大などの理由により、軍艦の戦闘に海兵は必要でなくなる。海兵隊は装甲艦にも乗らなくてもよくなり、陸上での勤務が主となる。

1897年11月1日、中国山東地方で二人のドイツ人宣教師が殺害される²⁰。東アジアにおける貿易の拠点を求めていたドイツは、これを機会に即座に膠州へフォン・ディーデリヒス中将指揮下の東亞艦隊の軍艦3隻を派遣、11月14日

²⁰ この事件については、三好善吉：「中国、十九〇〇年 義和団運動の光芒」中公新書、1996年、67ページ以降が詳しい。

には上陸部隊約 720 名が膠州湾を占領する。ここはすでに乾隆帝 (1735—95) の時代に税関が置かれ、交易のための港として開かれていた。1890 年代になって中国は防衛・貿易の重要拠点として膠州湾に再び着目し、3000 人の守備隊を置いていた。しかし中国軍はドイツ艦隊が現れたときには油断をしていたらしく、はじめは歓迎の意を表し、上陸後も司令官は演習だと思っていた²¹。この間上陸部隊は高地を占拠し、敵陣営を砲撃可能な状態にしたうえで、3 時間以内にすべての砲と弾薬を置いて立ち去るよう中国軍に勧告する。中国軍司令官は、最初は通訳が訳し間違えたかと思ったほど驚くが、まもなく不利な状況を自覚する。こうして中国軍は内陸部へ撤退し、ドイツの陸戦隊は無血占領を果たす。とは言え、フォン・ディーデリヒスが引き続いてこの部隊に周辺地域への進出を命じたときには、中国軍との衝突が起こり、その後も住民との小競り合いなどもあって、双方に若干の死傷者が出ている。

1998 年 1 月、1200 名の海軍歩兵大隊 (Marine-Infanterie-Bataillon) と 300 名の海軍砲兵分遣隊 (Matrosen-Artillerie Detachement) をのせた汽船ダルムシュタット号が膠州に到着する。前者は前年の 12 月に成立していたもので、すでに存在していた二つの海兵大隊から抽出された兵力と、陸軍部隊の中の志願兵からなる 4 個中隊の編成である。青島の管理は、帝国海軍省 (Reichs-Marine-Amt) に任せられ、2 月初め、トルッペル中佐が占領部隊の指揮官に任命される。3 月 6 日、ドイツは条約により、青島を含む膠州湾一帯を 99 年間租借し、山東省内の鉄道敷設権と鉱山採掘権を獲得する。生麦事件程度のことをきっかけに、人口 10 万、550 平方キロの土地を得たのである。この地域には、幅 50 キロメートルのいわゆる中立地帯が続いていた。この中立地帯では、中国はドイツ政府の事前の同意がなければ、いかなる命令を下すことも措置を取ることもできなかった。さらにドイツの部隊には、いつでも通過行進 (Durchmarsch) が許可されねばならなかった。この事件はこのあとイギリスの威海衛租借、ロシアの旅順租借を連鎖的に引き起こすことになり、列強による中国の蚕食が進んでゆく。

なお、1898 年 6 月 13 日の勅令により、この地に駐屯していた「海軍歩兵大隊」 (Marine-Infanterie-Bataillon) は、「第三海兵大隊」 (III. See-Bataillon) を名乗り、「海軍砲兵隊」 (Matrosen-Artillerie-Detachement) は、「膠州海軍砲兵隊」 (Matrosen-Artillerie-Detachement Kiautschou) を名乗ることになる。第一、第二海兵大隊がドイツ本国に拠点を置いていたのに対し、ここではじめて海外に駐屯

²¹ 膠州湾占領の経緯については Geschichte des III. See-Bataillons. Bearb. von C. Huguenin. Tsingtau (Adolf Haupt) 1912, 4ff. を参照。

する海兵大隊ができたことになる。アフリカの植民地に置かれたような「植民地防衛隊」(Schutztruppe, 1891年成立)ではなく、海兵大隊が置かれた理由は、青島が貿易港であるとともに、その通商を保護する艦隊の根拠地でもあること、また青島そのものが海軍の管轄下にあつて、総督も海軍の将校が就任していることであろう。軍港とその施設を防衛するのは、海兵部隊の主任務のひとつであった。なお、1899年に中国人の中隊が試験的に作られ、義和団事件の間に実戦にも投入されたが、逃亡兵が多いなどの理由により1901年に解消され、残っていた中国兵は警察官として雇用された。

義和団事件と海兵隊

義和団事件(1900年)については文献が多いが、現時点では一部しか参照できていないので、ここではドイツ海兵隊の関与を軸に略述するにとどめる。この戦役中に、ドイツ海兵隊と日本人との接触もあるので、機会があればより詳細に扱ってみたい。

日清戦争後、ドイツの膠州湾占領を皮切りに諸外国による中国での勢力圏拡大が激しくなり、またアロー号戦争後の天津条約(1858年)によるキリスト教優遇などにより、中国には義和拳と称する武術を用いる集団を中心に、キリスト教徒や外国人排斥の運動が高まる。西太后が実権を握る清国政府は最初はひそかに、のちには公然と義和団に加担し、各国に対して宣戦布告をすることになる(6月21日)。各国の北京公使館は、大沽(タークー)沖に来ていた艦隊から守備隊を要請、合計340名ほどの連合軍部隊が北京に派遣される。これに参加した第三海兵大隊所属のゾーデン少尉と50名の海兵たちは、6月3日にドイツ公使館の守備につく。6月20日には、ドイツのフォン・ケッテラー公使が、清国政府との交渉におもむく途中殺害される。この間、天津からイギリス人シーモア提督指揮下の2000余りの連合軍(500のドイツ水兵を含む)が、北京に救出に向かうが、鉄道を遮断され、抵抗が激しかったので、結局到達できない。ゾーデン少尉の海兵部隊は、東西600メートル、南北800メートルの公使館地区の中で、他の国の守備隊や義勇兵とともに6月20日から約2ヶ月の間、激しい包囲攻撃に耐えることになる。ゾーデン部隊は12名の犠牲者を出したが、8月14日に新たな救出軍が到着し、ようやく包囲は解かれる²²。

一方、大沽では6月17日に連合軍の攻撃があり、砲台が占領される。同日、

²² 公使館地区の攻防戦については、前掲の二つの「海兵大隊史」のほか、以下の文献を参照した。Deutsche Seesoldaten bei der Belagerung der Gesandtschaften in Peking im Sommer 1900. Christian Rogge. Berlin (Mittler) 1902.

天津では中国軍による租界攻撃が始まる。第三海兵大隊の2個中隊は、この付近での戦闘に参加し、のちの日露戦争時の旅順司令官ロシアのステッセル將軍指揮下の連合軍の一部となる。6月23日には天津租界を救援するが、東兵器庫をめぐる戦いでドイツ海兵隊は7名の戦死者を出している。6月25日には、ようやくステッセル軍がシーモア軍との連絡をつけ、敵は退却する。

この間列強は、さらに本国から軍を増強していた。ドイツは最大規模の増援軍を送るが、そのさい本国にいた第一、第二海兵大隊も「海軍遠征部隊」(Marine-Expeditions-Korps)として出動する。港湾の近くに駐屯し、本来海上輸送のための部隊である海兵隊は、海外での紛争に即応できるまとまった部隊として、まず投入が決定されたのである。野戦砲部隊と工兵隊も増強される。この遠征部隊は7月3日に出発するが、そのさい皇帝ヴィルヘルム2世は、「ドイツの旗は侮辱され、ドイツ帝国は嘲りを受けた。これに対しては、見せしめの罰と復讐が必要である。そこで私は、この不正に報いるために、諸君を今送り出すのである」という過激な演説をおこなって、のちに国際的な評判を落とす。8月15日、大沽に着くが、この頃ここには63000の連合軍が集まり、うちドイツ軍は陸軍部隊も含めて24000の兵力であった。連合軍は天津を経て北京に進軍し、ここでドイツ海兵隊の三つのすべての大隊が出そろふことになる。その後北京の各国軍は、周辺の敵軍と戦うためにさまざまな方向に進出してゆく。フォン・ヘップナー將軍指揮下の海兵隊は、北京の西側の地域で転戦している。この段階で連合軍全体の指揮を執ったのは、連合軍中最高位のフォン・ヴァルダージェー元帥である。このとき、第一、第二海兵大隊は、はじめて合同して一個連隊となり、陸軍の指揮下に入る。なお、この戦乱の中で、連合軍による略奪が各地でなされた。

山東半島も義和団運動の中心地のひとつで、1900年初めに、イギリス人宣教師が殺され、2月にはドイツ人の鉄道技師も襲われて、彼らの仕事場が破壊される。そのため青島のイエシュケ総督は、周辺に第三海兵大隊から中隊単位の部隊を派遣し、平穏化を図る。各地で義和団側の激しい抵抗があり、激戦が交わされる。海兵隊は中立地帯に進出し、膠州市と高密(カオミー)を占領して、そこに一個中隊ずつの駐屯軍を置く。ようやく1906年に、これらの部隊は中国政府に管理を任せて、青島に退くことになる。

義和団事件で派遣されたドイツの遠征軍(Expeditionskorps)には、2万人の陸軍部隊が含まれていたが、その後この部隊は、講和条約によって開港された都市に分散し、例えば上海に約800人が駐留していた。しかし、遠征軍はしだいに本国に引き揚げて減少し、1903年には青島近郊の四方(スーフアン)に駐留

する1個大隊のみとなり、これも1906年に解隊される。これに代わる形で、1909年4月29日の勅令によって、第三海兵大隊のもとに「東アジア海軍分遣隊」(das Ostasiatische Marine-Detachement)が作られる。この部隊は当初1個中隊規模で、いわば公使館守備隊であり、うち1個小隊が天津に置かれ、それ以外は北京に駐留していた。しかし1912年には3.5個中隊の規模にまで増員され、第3海兵大隊から独立している。1914年の日独戦争の直前、この部隊は青島に呼び寄せられ、このときは臨時招集によって5個中隊規模となっている。

義和団事件後、第三海兵大隊そのものにも各種の中隊が加わり、増強される。すでに1898年に、「海軍野戦砲中隊」(Marine-Feld-Batterie)が、可動の砲撃援護部隊として大隊に含まれていた。1902年には第五(騎乗)中隊が追加されるが、これは騎兵部隊ではなく、基本的には歩兵で、乗馬によって移動する部隊である。さらに1911年には工兵中隊が、1912年、機関銃中隊が追加される。これらの中隊は、まず小隊規模の部隊が作られ、それが増強される形でのちに中隊となっている。また、ドイツ本国では、青島の第三海兵大隊への補充・交替要員の供給源として、1912年から翌年にかけて、「第三基礎海兵大隊」(III. Stamm-Seebataillon)が北海沿岸のクックスハーフェンに作られた。なお日独戦争直前に、主として臨時に召集された兵士や志願兵からなる歩兵2個中隊が追加されている。のちに松山・丸亀に収容された捕虜たちの中には、この第六、第七中隊の所属者が多く、したがって比較的年長の、さまざまな専門業種の人々や知識人たちがいた。一方徳島収容所には、「膠州海軍砲兵隊」所属者が多く、しかもたまたまハンゼンとその軍楽隊の成員たちがまとまっていた。偶然にこれらの人々が集まることになった板東収容所で、諸々の文化活動が盛んになったのである。

ドイツ領南西アフリカにおけるヘレロ戦争

次に、ドイツ領南西アフリカで起こったヘレロ族の反乱(ヘレロ戦争)への海兵隊の関与を見てみよう。この反乱の経過はやや複雑なのでまず整理しておく。1904年初め、南西アフリカ(現ナミビア)の内陸部のやや北寄りの地域で、ヘレロ族の反乱が勃発する。まずは現地の植民地守備隊(Schutztruppe)と居合わせた砲艦「ハービヒト」の陸戦隊が、そして少しのちに投入された海兵隊が協力して、ロイトヴァイン総督を指揮官としてこの反乱の鎮圧に努めるが、この段階では(5月頃まで)成功しない。第二の段階で、東アフリカでの実績のあるフォン・トロタ中将の指揮下に再度出撃がなされ、このときは増強された植民地守備隊にヘレロ族居住地の南に隣接するホッテントット族も加わり、8月

11日のWaterbergの戦いで決定的な勝利を得る。こうして11月にはヘレロ族の反乱は鎮圧されていたが、その少し前の10月初めに、今度はWitbooiを指導者とするホッテントット(ナマ)族が大規模な反乱をおこす(第三段階、ナマ戦争)。これに対しては、植民地守備隊がさらに1905年8月の段階で14000人以上まで増援され、最終的には1907年3月31日に鎮圧する。この一連の戦争で、ドイツ軍の死者は戦病死を合わせて総計で2000に達した²³。ドイツの海兵隊が関与したのは主として第一の段階なので、この時期の経過を見てみることにする。ここでも海兵は即応部隊として海外の紛争に投入され、もっぱら内陸部での戦いに従事している。

南西アフリカは比較的気候が良く、ヨーロッパからの移民が増え、それによって土地の収奪や商業の独占、強引な文化的同化などがおこなわれ、原住民の不満が高まっていた。ヘレロ族は、植民地守備軍がホッテントット族に気を取られて南部に力を注いでいるのを見計らって蜂起し、鉄橋や電信線を破壊し、農場を襲って100人以上の入植者を殺害する。彼らはホッテントット族との抗争により戦闘に熟練しており、銃か棍棒で武装し、「銃を持つ者が倒れば他の者がそれを取る」という戦い方をした²⁴。また、ブッシュの多い地形を利用して、事前に気づかれずに攻撃や退却をおこなうなど、巧妙な戦術を用いた。当初反乱に対処できたのは、76人の植民地守備隊と巡洋艦「ハービヒト」からの約230人の陸戦隊(彼らは断たれた鉄道や電信線を回復した)のみであり、海兵の派遣が要請される。1月17日に出された海軍遠征隊(Marineexpeditionskorps)の編成命令にしたがって、19日のうちに準備が終えられ、21日には輸送船「ダルムシュタット」での出港がなされている。この遠征隊は、第一海兵大隊から抽出された第一、第二中隊と、第二海兵大隊から抽出された第三、第四中隊他、合わせて約700名の大隊規模の部隊である。2月9日、南西アフリカのSwakopmundに入港している。

その後遠征隊は鉄道で内陸部のKaribib(反乱地域の西端)に到着し、小規模な前哨戦を経たのち、植民地防衛隊(ほとんどが騎乗兵)と合同して三つの混合部隊が編成される。植民地防衛隊のフォン・エストルフ少佐指揮の西部部隊と、総督ロイトヴァイン大佐直属の最も強力な中央部隊、海兵隊のグラージェナ

²³ ここまでは主として Werner Haupt: Die Deutsche Schutztruppe 1899/1918. Utting (Nebel Verlag) 1988, S. 48ff.を参照。なお、この文献は植民地守備隊とアフリカの反乱を概観するには便利だが、やや一面的な所があり、専門書というよりは一般向け概説書というべきである。

²⁴ Geschichte des I. Seebataillons, S. 155.

ップ少佐指揮の東部隊であり、それぞれ数個中隊から成っていた。全体として、西部隊と東部隊で両側面を形成し、中央部隊が Okahanja から北上して打撃を加えるという、一種の包囲戦を意図していたようである。「第一海兵大隊史」は、最も苦戦を強いられ、犠牲も多かった東部隊の記述に多くの紙面を割いているが、ここではその部分を概観して、この戦争における海兵隊の苦戦をかいま見ることとする。東部隊は、植民地防衛隊の2個中隊と海兵隊の第1、第4中隊からなり、任務は、遊牧民ヘレロ族が彼らの財産である家畜とともに東のイギリス領に入るのを防ぐことであった。この部隊は東進してのち北上し、中央部隊の攻撃から逃れてくる敵を受け止める壁を形成する計画だったようである。

途中二つの支隊に分かれて進むが、3月13日、右翼隊が Owikokorero で敵の大部隊と接触し、激しい戦闘に巻き込まれる。敵はしだいに兵数と火力を増し、両翼を包囲しようとする。午後4時半ごろからの戦闘で、この右翼隊はかなりの死傷者を出す。夕闇がせまり、敵軍の攻撃はやむが、この日7名の将校と19名の兵が戦死した。銃火の激しさに、彼らの遺体や武器・弾薬を回収することもできないほどであった。その後左翼隊と合同するが、それでも藪の多い地形と強力な敵のため攻撃は断念し、接触を保つにとどめる。4月になり、東部隊は東に退却を始めるが、4月3日、Okaharui で全方向から敵の攻撃をうける。ここでもまたブッシュの中で銃撃戦がおこなわれ、ドイツ軍は押されるが、敵は来た時と同様突然姿を消す。この1時間半の戦いで、東部隊全体で将校1、兵31の死者を出す。その後も退却は続くが、疲労と食糧不足、雨と寒さのため、兵員の健康状態は低下し、ついにはチフスが蔓延するようになる。4月11日最初の病死者が出、16日には傷病兵を後送して、この時点で東部隊の兵力は将校13、下士官44、兵卒232に低下する。24日の時点で、兵数は151人となり、5月に入ってもチフス患者は増え続け、毎日病人が死んでゆく。結局5月6日に命令によって東部隊は解消され、海兵中隊は予備に回される。「東部隊は、その苦労の果実を摘み取れなかった。」²⁵この間、中央部隊も敵と遭遇し、かなりの損害を与えていたが、全体としては、敵の兵力が多すぎたことや各部隊間の連絡の不十分さなどにより、作戦は失敗する。その後も海軍遠征隊の兵力は、本国からの補充を受けられなかったため、しだいに消耗し、7月11日には359名のみとなる。残存部隊はそれから作戦に従事するが、1905年2月、後方の部隊との交代が始まり、3月から4月にかけて、ヴィルヘルムスハーフェンに帰還する。

²⁵ Geschichte des I. Seebataillons, S. 205.

なおこの戦争は人種主義的色彩を帯びた絶滅戦の様相を呈していたということが、ドイツ側による捕虜待遇を扱ったある論考²⁶から知られる。この点については、戦争の全期間について概略を紹介しておこう。戦争初期の頃は、特に入植者殺害の情報により、ヘレロ族を容赦せず捕虜を取らないという傾向があり、捕えられた敵兵は裁判なしにすぐ銃殺された。また巡洋艦「ハービヒト」の陸戦隊は、虐殺によってヘレロ族の間に恐怖を掻き立て、これによって蜂起していなかった人々をも敵側に追いやった。ロイトヴァイン総督の後を受け、第二段階から指揮を執ったフォン・トロタ中将は、強い人種主義的偏見を抱いており、反乱部族に対してはあからさまなテロリズムや残虐行為さえ行使すべきだと考えていた。すでに南西アフリカに向かう船の中で、「将校は、ドイツ軍に対し反乱行為を現行犯で見つかった有色人の住民、例えば戦う意図で武器を持っているのが見つかったすべての反逆者、を法的審理なしに、過去の戦争慣習にしたがって射殺させる権限を持つ」という指示を、彼は出した。Waterbergの戦いでは、ヘレロ族を包囲してオマヘケ（カラハリ）砂漠の側だけを開けておき、10月初めに「砂漠から戻ってくるヘレロは射殺せよ」という布告を出す。砂漠に追い込まれたヘレロ族は、家畜を失って多くが飢えと渇きで死に、生き残りは投降する。ヘレロ族の正確な人口はわからないが、戦争前は7万から10万の間だったのが、戦争後は17000から4万の間にまで減ったと推定されている。フォン・トロタへの批判がドイツ本国でも高まり、結局フォン・ビューロー首相の圧力によって上述の布告は変更され、降伏したヘレロ族は女性と子供も含めて強制収容所に入れられ、男性は強制労働をさせられることになる。しかし、収容所の状況はきわめて劣悪で、抑留者の死亡率は高かった。特にリュエディッツ湾のハイフィッシュ島にあった最大の収容所は、海辺の湿った寒冷な気候、ドイツ人による食料支給の不足、重労働、伝染病により、1906年9月から1907年4月の間に、1795人の収容者のうち1032人が死亡した。この論考の著者はこう述べている。

「人種的に『価値が劣る』とされたアフリカ人は、『騎士道的な戦いの仕方』という意味においては同等の敵とみなされなかった。彼らに対しては、『フェアな』戦争の規則は適用されなかったのである。」²⁷

²⁶ Jürgen Zimmerer: Kriegsgefangene im Kolonialkrieg. Der Krieg gegen die Herero und Nama in Deutsch-Südwestafrika (1904-1907). In: In der Hand des Feindes. Hrsg. von Rüdiger Overmans. Köln (Böhlau) 1999, S. 277-294. もっとも、ここに言う「捕虜」とは、当時の国際法の規定にもとづいた「戦争捕虜」ではないことを、著者はことわっている。ヘレロ族は反乱者とみなされ、敵国の正規軍ではなかったからである。

²⁷ Zimmerer, S. 293.

ドイツ領東アフリカにおけるマジマジ戦争

1905年夏、ドイツ領東アフリカ（現在のタンザニア、ルワンダ、ブルンジ）南部で反乱が起こる。原因は、原住民に対する厳しい税の取り立てや、プランテーション農場における低賃金での重労働、狩猟の禁止など、植民地支配層による原住民の全般的な抑圧とされている²⁸。反乱の少し前から内陸部で広がり始めた「マジマジ教」という宗教の信者が、この反乱の主体をなしている。まず、予言者 Kinjikitile がヴィジョンを得て、聖水 Maji（スワヒリ語の語彙素で水を意味する）の効力を説いて勝利を保証し、団結してドイツ人と戦うことを神と先祖が求めていると人々に伝える。「マジ」によって、敵の弾丸は水滴に変わり、敵の力は弱くなり、動物も味方にできるというのである²⁹。このような教説や、地元の伝統的な宗教と千年王国説などが混合された折衷主義的な宗教的社会運動である点など、義和団運動を想起させるところもある³⁰。反乱は8月1日、海岸部の Ssamanga で始まるが、予言者はもう8月4日に捕えられて絞首刑になる。しかし、それ以後も hongo と呼ばれる使者たち（Kinjikitile に憑いたとされる霊もこう呼ばれていた）によって、容器に入れた聖水とともにこの教えは各地に伝えられ、マジマジ教は、20以上の異なる民族集団の百万人以上を共通の戦いへと統合する。教徒はみずからを「神の兵」と称し、プランテーション農場やインド人商人、宣教師などを襲う。特に植民地支配の象徴のようにみなされた綿花の木が引き抜かれた。反乱はまもなくドイツ領東アフリカの南部全体（三十万平方キロ、現在のドイツの面積とほぼ同じ）に広がる。反乱軍は銃のほか、毒矢や火矢、落とし穴などを用いてゲリラ戦もおこなった。しかし、1905年末のドイツ軍との戦いで、機関銃によって大損害を受け、マジマジ教の北部への拡大は止まり、その後勢いを失って1907年にはほぼ鎮圧される。

この紛争への海兵隊の関与について述べる。反乱勃発時に対応可能だったのは、小型巡洋艦「ブッサルト」の陸戦隊と主としてアフリカ人からなる800人

²⁸ Jigal Beez: *Geschosse zu Wassertropfen. Sozio-religiöse Aspekte des Maji-Maji-Krieges in Deutsch-Ostafrika (1905-1907)*. Köln (Rüdiger Köppe) 2003, S. 64ff.

²⁹ マジマジ教の詳細については Beez, S. 109ff. 参照。なお、この文献の題名“*Geschosse zu Wassertropfen*”（弾丸が水滴に）は、上述のマジマジ教の教義から取ったものである。

³⁰ これらの運動の千年王国説との関連については、Beez, S. 15ff.、G.N. スタイガー：「義和団」（藤岡喜久男訳）光風社、1990年、125ページ以降、また前掲の「中国、一九〇〇年」などを参照。

の部隊だけだったので、1905年8月17日、ゲッツェン総督は本国に急速な増援を要請するが、このときも最初に応じることができたのは海兵隊であった。ヴィルヘルムスハーフェンにて、第一、第二海兵大隊から「海軍歩兵分遣隊」*Marine-Infanterie-Detachment* が編成される。フォン・シリヒティング大尉を長とする170名ほどの中隊規模の部隊に50名あまりの機関銃部隊がつけられている。鉄道でオーストリアを経由してトリエステから汽船「ケルバー」に乗船、スエズ運河、紅海を通過して9月半ばにダルエスサムールに到着する。義和団事件やヘレロ戦争のときと比べて兵数が少ないのは、後に続く増派部隊が来るまでの応急の部隊で任務が限定されたものであったこと、南西アフリカでの戦いがまだ終わっていなかったこと、東アフリカではアスカリと呼ばれるアフリカ人兵士が多数雇用されていたこと、などの理由が考えられる。この限定された任務とは、海岸の重要な諸地点の確保と、白人と友好的な原住民を保護することであった。この部隊の実際の行動については、詳細は省いて概略のみ説明する。赤道に近いこの地域の気候や衛生条件、やはりブッシュの多い地形のため、ドイツ兵は主に海岸拠点の守備に使われ、内陸部での戦いは主としてアスカリに任された。海岸部から、尉官や下士官を長とした少数のドイツ兵と数十人のアスカリ、さらに運搬などの補助兵を含むいくつかの部隊が内陸部に進み、威力偵察や入植者の安全な地域への誘導、反乱指導者の探索などに従事している。戦闘に巻き込まれることもあったが、それよりも厳しい気候条件などのためドイツ兵の半数が病気となり、複数の部隊が退却を余儀なくされている。アスカリの一部にも反乱に同調の兆しがあり、後方に移動させたり銃を取り上げたりしたこともあった。しかし、課せられた任務はおおむね果たされ、反乱が北部に広がらなかったのは、この分遣隊の一部が鉄道でビクトリア湖畔の Mwanza に運ばれ、これが北部の諸部族への威嚇となったからだという指摘もある³¹。

その後の反乱の経過も略述しておく。9月終わり頃から多くのアスカリの増援を受けた植民地守備隊の反撃は苛烈であった。ドイツ側は、食料を奪い、村落・耕地を破壊するという飢餓・焦土作戦に出る。アスカリはアフリカ人ではあるがタンザニアの出身ではなく、彼らの横暴さはすでに反乱以前にも圧政の一要因であったが、この戦争における彼らの残虐な行為も反乱側原住民には恐怖の的であった³²。また、機関銃によって受けた大損害により、「マジ」の効力への疑いが反乱側に生じ、指導者たちも次々に死んでゆく。こうして屈服させられた原住民は完全に武装解除されて、野獣の害を防ぐこともできなくなり、

³¹ Beez, S. 91.

³² Beez, S. 96ff.

ある地方は人食いライオンの跋扈するところとなる。戦争と飢餓により、人口は激減し、例えば Songea 地区では 166000 人の住民が 20000 人に減る。全体の死者は二十万以上、別の説では、南タンザニアの人口の三分の一、二十五万から三十万が死んだとされる³³。この数は、ヘレロ族の反乱におけるよりもはるかに多い。指導層の壊滅のため社会が破壊されてしまった部族集団もある。その影響は現在にも及んでおり、マジマジ戦争が行われた地域は、19-20 世紀の変わり目には非常に生産的な土地であったが、現在では人口が少なくきわめて貧しい。ここにはアフリカ最大の野生動物保護区がある。ドイツ側の死者は少なく、海兵隊は 2 名の病死のみで、植民地守備隊の死亡者は、ドイツ人 4、アスカリ 73 にすぎない。

結び

ここでドイツ海兵隊の性格についてまとめておきたい。一般的性格について述べれば、ブランデンブルクやプロイセン王国の時代、海兵隊はまず船上における近接戦闘での戦闘員としての性格の強い部隊であり、この点で操帆や艦砲の射撃を担当する水兵との差異化がなされていた。ついで、プロイセン王国時代の後期から帝政期の 1900 年頃までは、港湾や沿岸の要地の守備や上陸戦における陸戦隊としての役割が強くなり、そしてそれ以降は、船で輸送されるだけで、実際の戦いは陸上（主として植民地）でおこなう部隊となる。船での輸送に慣れており、港湾の近くに駐屯地を持つということから、事ある場合に即応できる部隊であるということが出てくる。普仏戦争（1870-71）から第一次大戦までの四十数年のあいだ、ヨーロッパにおいてほとんど戦争のなかった時代に、海兵隊は、ドイツの利害に関する地域に紛争が起こればまっさきに派遣され、陸軍の部隊に比べれば戦う機会は多かった。平和な時代に戦争慣れしていた部隊と言える。そして、特にアフリカ植民地の戦いは、人種主義的な要素を持つ苛烈なもので、原住民の反乱軍にはあまり容赦がなされなかったことも見た。その意味で、ドイツ海兵隊は必ずしもいわゆる「クリーンな戦争」だけをおこなってきたわけではなく、やや古めかしいステレオタイプな表現を用いれば、「植民地帝国主義の先兵」ということができるかもしれない。もっとも、部隊全体の戦歴はその個々の所属者の戦歴と同じではなく、最後の大規模な植民地戦争であるマジマジ戦争から第一次大戦まで 10 年近くが経過してはいるが。

³³ Beez, S. 103.

海兵隊と陸軍との関係については、これまで見てきたことから、非常に密接なものであることが明らかになったと思う。ブランデンブルク海軍における発祥のときから、海兵隊は元陸軍の銃兵であり、その後も将校については二、三年間の陸軍勤務の後にはじめて海兵隊に配属されるという規則ができ、陸軍とのあいだで人事に関する流動性は高かった。緊急の増強のさいには陸軍部隊から補充を受けたこともある。こうした両者の深い関係が、海兵隊が海軍に属していながら陸軍と共通する階級名を持っていたことの原因である。日独戦争のときには、東アジア地域にいるドイツ人が臨時に招集されるが、このとき集まった人々の中には陸軍の予備役・後備役兵もいた。本国から遠く離れた地でそもそも戦えるドイツ人が少なかったということもあるだろうが、陸軍の予備役・後備役兵を、海軍ではあっても海兵隊の兵士として戦わせることについては、上述のような関係からして何の問題もなかったと考えられる。

最後に訳語について述べる。同じ部隊を表わす言葉として、ドイツ語には *Seesoldaten* と *Marineinfanterie* の二語がある。もちろん、基本的には前者は複数形で、個々の兵士の集まりという意味を持ち、後者は組織や制度を指すといった、ニュアンスや用法の違いはあるだろう。大和言葉と漢語の相違のようなところもあるかもしれない。この二語を素直に逐語訳すれば、海兵隊、海軍歩兵、となる。これをそのまま採用するのが自然な発想であり、また、さしあたりそれでよいと考える。その結果、両者が同一の翻訳文の中で併用されることもありうるが、その場合の問題は、予備知識のない読者が両者を別物と考えてしまう可能性があることだろう。欧米語では換称代名詞というものもあり、同一物を表わす複数の語があれば同じ表現の連続を避けるという慣習があるから、二つの呼称があるのはむしろ表現上のメリットなのかもしれない。しかし、翻訳においては事情が異なる。上述のような誤解を防ぐためには、二つの訳語の意味するものが同じであることを、注などで明記すればよいだろう。どうしても一つに統一すべき理由があるならば、「海兵隊」の方がよいのかもしれない。

「海兵隊」はアメリカ軍のそれでなじみになっているが、「海軍歩兵」の語は、まだわれわれにはほとんどなじみがないからである。ただし、*Marines* などの語を採用しているのは米英であり、仏独などでは *Marineinfanterie* 系の語を用いている。これは、海軍国と陸軍国の歴史や思想の違いの反映であり、したがって、内実の相違もあるという可能性も考えられるので、現時点では最終的な判

断は控えたい。旧日本軍には、「海軍特別陸戦隊」という部隊があったが、これは、訳語として使用するにはあまりに特殊的で、限定された語感を持っている。また単に「陸戦隊」では、もともと軍艦の乗組員から上陸などのために編成される部隊という意味があり、逆に一般的すぎて不適切であろう。「海軍」の「歩兵」は日本軍にはなかったから「海軍歩兵」は使えないという意見もある。しかし、日本軍の用語・概念として存在しなかったという理由で、ある訳語が使用できないとなると、「海軍特別陸戦隊」しか使えなくなる。本来が外国のものであるのだから、日本軍になかった言葉を訳語として当てても、それほど問題ではないように思われる。いくつかの国では、現に「海軍」の「歩兵」という発想があるのだから。